

第12章 健全性（長期安全性）の分析

本日のテーマ

- ① 健全性分析の意義（分類）

- ② 資本構造分析
自己資本比率
負債比率、固定負債比率、営業CF対負債比率
借入金依存度、借入金自己資本依存度
有利子負債月商倍率
金利負担能力（インタレスト・カバレッジ）

- ③ 投資構造分析
固定比率
固定長期適合比率

- ④ 利益分配性向分析
配当性向
配当率

① 健全性分析の意義（分類）

調達と運用のバランス

調達面では自己資本と他人資本のバランス→資本構造分析

運用面では有形固定資産と長期的な調達構造のバランス→投資構造分析

② 資本構造分析

★自己資本比率（自己資本／総資本）

高いときは借入依存低い

建設業は概ね低め（特に売上 5,000 万円未満では-18%）平均は 35%前後

★負債比率（負債／自己資本）

100%以下（自己資本比率 50%以上）であれば、負債を自己資本で担保している状況

★固定負債比率（固定負債／自己資本）

長期借入金を自己資本でカバーできているかどうか？

★営業CF対負債比率（営業CF／負債平均）

本業での債務返済能力を示す

アメリカでは 20%以上で健全とのこと

★借入金依存度（（長短借入金＋社債）／総資本）

総資本利益率 > 支払利率 → 財務レバレッジ効果で利益増大

★借入金自己資本依存度（（長短借入金＋社債＋自己資本）／総資本）

出題可能性低い

★有利子負債月商倍率（（借入金＋社債＋新株予約権付社債＋CP）／月間売上高）

有利子負債の滞留月数（小さい方が良い）

建設業全体では約 2 倍

★金利負担能力（（営業利益＋受取利息・配当金）／支払利息＋社債利息）

インタレスト・カバレッジともいう。単位は倍

1 以上あれば経常収益で他人資本コストをカバーできている

③ 投資構造分析

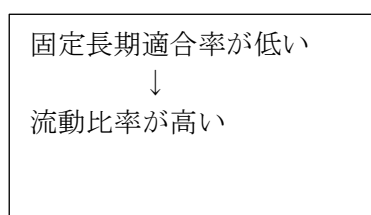
★固定比率（固定資産／自己資本）

電気機械器具 130%、鉄鋼 165%、化学 101%、卸売 160%、建設 95%
これは建設業が工場などの設備が少ないことに起因していると思われる

★固定長期適合比率（固定資産／（自己資本＋固定負債））

長期投資は長期調達（自己資本＋長期借入金）でまかなうという発想
これは 100%未満でないはず

流動資産	流動負債
	固定負債
固定資産	自己資本



④ 利益分配性向分析

★配当性向（配当／当期純利益）

配当原資である当期純利益から、どれくらいの株主に還元されているか？

★配当率（配当÷資本金）

<マトメ>

練習問題

12.1 財務レバレッジは（総資本／自己資本）であり自己資本比率の逆数となる。要は自己資本よりも他人資本が多い状況である。日本の経済発展は間接金融中心であったため有利子負債が大きく結果として財務レバレッジは高い傾向にあったが、経済のグローバル化にともない低下傾向にある。

12.2 インタレスト・カバレッジは（営業利益＋受取利息）÷支払利息であらわすことができる。よってこの数値が 1 以上であれば、経常的な収益で支払利息をまかなえており健全な状況をあらわしているといえるだろう。